



# 龍馬研究会



## 江戸時代

土佐藩には四つの大きな街道があった。甲浦への土佐東街道、立川から北山越えの土佐北街道、池川・用居から伊予へ抜ける松山街道、そして高岡・須崎から中村へ抜ける中村街道である。中村街道のうち一つは、久礼長沢から大野見液沢へ抜ける「本蚯蚓」であり、もう一つが久礼長沢から四十町床鍋へ抜ける「添蚯蚓」である。この道は龍馬も通ったと言い伝えが残っている。蚯蚓のように曲がりくねった道がネーミングの由来のようであり、最短コースとして人気があった。中土佐町ではこの道を「添蚯蚓遍路道」として保存し、遺産として残そうとしている。



## 近世から江戸時代にかけて

庶民の娯楽は信仰の旅であった。お伊勢参りや金毘羅参り、そして四国遍路八十八カ所参りである。他領民も遍路の旅に入国した。このため土佐藩では不審な入国者や遍路と称して不法を働く者を取り締まった。遍路に回るものは「往来手形」を発行し、滞在の村では印鑑を村役人が押し、遍路道以外の通行を禁止した。これが今日「遍路道」として各地に残っている所以である。



## 龍馬研究会一行

先日（五月三日・高知新聞五月五日付掲載）

この添蚯蚓古道を龍馬や殿様気分になって歩こうツアーを実施した。中土佐町の林勇作氏の案内で、長沢地区の登山口にバスで到着。高速道路工事のため一時、通行止めになっていたものが、平成二十年十二月二十四日に再開通したものである。一行は、急な石段に変わりこの人工の道を必死で登ることとなった。石段を過ぎれば、昔ながらの遍路道に戻っていく。七子峠（海拔二九三m）までの登りは、行程5kmほどの距離のためハイキング気分が楽しめる。江戸時代の往還（今八m）あったとのことだが、今は風雪にさらされたのか、その半分ぐらいの道も多い。ただ、要所要所には当時のままの道幅が残っており、石畳の跡も相当の距離に残っていて、趣があり、すごいことだと感心させられる。



## 庵跡

途中、ちょうど中間あたりの峠付近に明治時代まで茶屋があったという庵跡がある。昔、弘法大師（平安時代初期の僧）が、海月庵という庵に滞在し、地藏菩薩を刻んだという修行伝説もあるとのこと。ここで我々一行は昼食タイムと休憩をとる。ちょうど、目の前が黒竹林となっており、視界が遮られているのが残念だ。というのは海月庵の語源は久礼湾上の月を眺めて名付けたと言われているし、ここから百mも行くと、久礼湾が誇る絶景「双名島」が見える場所があるからだ。ここから海が見えたらと思いつながら、遍路墓や遍路石に敬意を表しながら、ここをあとにした。



## 終着地点

ここからは平坦な山道が続く。すぐ下を走る国道五十六号線の車の音が聞こえてくる。その合間に季節柄、ウグイスのホーホケキヨも聞こえる。このコントラストは何なのか？微妙な快感を覚えながらも、終着地点の七子峠に到着した。

## 龍馬研究会

事務局長 和田真一